

国

語

(60分)

試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かず、
左記の注意事項をよく読むこと。

注意事項

- 1、問題冊子は、20ページまであります。
- 2、解答用紙は問題冊子の中央にはさんでいます。解答はすべて、解答用紙に書き込みなさい。
- 3、始め、の合図でページ数を確認し、受験番号・名前を書きなさい。
- 4、問題の内容についての質問には、いっさい応じません。印刷のはっきりしないところがあれば、静かに手をあげなさい。
- 5、時間を知りたいときも、静かに手をあげなさい。
- 6、具合が悪くなったり、トイレに行きたいときは、手をあげて監督の先生の指示に従って行動しなさい。
- 7、問題冊子は、各自持ち帰ってよろしい。

一 筆者が最近知り合った若い新聞記者（彼）は、教養や知性を重視しており、それらを軽んじるネット社会の風潮に危機感を抱いていた。これに続く次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（なお字数制限のある問いは句読点や記号も一字に含みます）

彼はふとこう漏らしたのです。「本をもっと読みたいのですが、何を選んでいいのかわからないのです」

おや？ と思ったのは、私だけではないようで、そばにいた知人はこう返しました。

「気になるもの、好きな分野の本を選べばいいのでは？」

すると彼は少し困ったような顔をして、こう述べました。

「確かにそうなのですが、ちゃんとしたものを選ぶだけの目がまだ自分にはないから何を選んでいいかわからないんです」

彼は鋭敏でありたいと願い、これまでとは違う生き方を模索したいと話すような向上心を持った人です。ですが、善し悪し

はともかく、彼自身も気づかないうちに、みんなが認める正しさを求めるといった、あらかじめ用意された時代の感受性の枠にはまっているのかもしれない。

* ブックレビューのサイトをはじめ、大量の情報があるのですから、その気になれば何が自分に向いているのか選ぶことができるはずではないか？ そう思う一方、書籍の点数も多く、あれこれとやかく言う声もありすぎて、何か選んだところですかさずそれを否定するような情報も耳に入ってくるとしたら、いったい何を讀んでいいのかわからなくなってしまふ。情報の* オーバーフローで感覚的に混乱に陥ってしまうのもわかります。そこを突破するのは「自分は何が読みたいのか」といった原点にある自分の意に忠実になることでしよう。だけど意欲を貫くにはあまりにも情報が膨大すぎて、調べる気力が萎えてしまふ。そうなると効率的にセンスの良いものを選びたくなるでしょう。

③ その経緯を理解はしつつも、だからこそ彼の発言に感じたのは、試行錯誤の体験の中で何かを得て、何かを捨て、自分の腕と眼力を磨く道筋があることを本気で信じられないのだな、ということでした。自ら体験して得られることに価値を置けない。物事を見定める自信を持ちたいが、それと同じくらい自分に対する不信感を持っているとも言えますか。④ 自分への

疑念が募るほど、ものごとをちゃんと選ぶといった、目利きができるようにと導いてくれる確固とした解がありえるはずだ、という自覚されない期待が増すのかもしれない。

「自覚しないままに」というのも、彼は職場の上司が提示する正しい仕事のあり方、会議の非効率さに*辟易としていたからです。慣例に不満を持っているにもかかわらず「自ら選べない」と表明してしまうのは、やはり自分の外に答えがあると思っ
ているからでしょう。

知人は彼に対して「何事もやってみないとわからないし、失敗しても別にいいじゃない？」と言いました。正論です。それに対して「そうなのですが……」と言いはしても、やはり得心していない様子の彼を見ていて思ったのです。「与えられた正しさを答えとして受け入れる」といった、受容の態度をもたらずのは「失敗」をちゃんと把握できていないからではないかと。「やってみればいい」というアドバイスは、非の打ちどころがありません。けれども、決して彼にとつての答えにならないのは、結果を保証しないからです。確かにその通りかもしれないけれど、やってみて結果が伴わないで失敗したら？ その問いに何も応えてはくれません。「いや、だから試すんでしょ？」と言つても、堂々巡りに陥るでしょう。そうなるのは彼個人の勇気が足りないからでしょうか。経験していないから、やったことのない事柄に不安になっているのでしょうか。そう単純な話ではないようです。

少し*俯瞰して考えたいと思います。彼を含む世代がどのような体験をしてきたのか断片的に聞いた内容から想像してみます。学校では、漢字のハネやはらいがちゃんとできていないといつては減点され、みんなと仲良く遊べないからといっては注意され、答えと合うことが正しいことであり、協調性を論される一方で個性的であれと励まされてきた。彼にとっては

a	事が	b	事、どこにあるかわからない正しさに揃えるのを求められてきたわけです。
---	----	---	------------------------------------

常に正解は教える側が知っているのです。その教えられた正しさから逸脱すると「迷惑をかけるな」とか「それは自由ではなくワガママだ」とすかさず修正されました。

あらかじめ設定された正しさの枠、いわば閉じた体系の中で「できること」が絶えず求められます。独自の考えに基づいて答えることも、決められた条件を超えることも失敗とカウントされ、徹底して失敗はありえない学習環境の中で育てば「やっ

てみればいい」という言葉は空々しく聞こえるでしょう。

さんざん否定されてきたことを唐突に「やれ」と言われたところで、どうせやれば*ペナルティを与えられるという思いもどこかで持っているかもしれないかもしれません。なぜ失敗してはいけないのか？ という単純素朴な問いはとつと抹消されてしまつたのです。

試すとは不確定さに向けた行為です。**A** 正解をもたらしません。*件の彼の態度に見られるような「ハズレを引きたくない」という思いを言い換えるならば「**X**」になるのでしょうか。これは一見すると道理は合っているように思えて、論理的におかしいのは、正解を確認する行為は試すとは言わないからです。

こういう態度に対して経験を積んだ人たちは言うでしょう。「失敗してこそ成功があるのだから臆せず大いに失敗しなさい。現に成功した人たちは失敗から学び、失敗を乗り越えて成功した。だからこそ大人たちは若者の失敗を認める度量が必要だ」経験から語られた寛容な言葉に、心置きなく新たなことに挑もうと思う人もいるかもしれません。**B**、私はどうにもうなずけないモヤモヤを覚えます。**C**、こうした言い様は乗り越えることを主眼にしている、決して失敗の意味を我がこととして捉えていないと思うからです。

挫折を乗り越える話が多くの人に好まれるのは、そこに克服のドラマを見出すからでしょう。でも、それは体験したはずの失敗を脇に置いて、成功法や正解を求めているだけで、失敗を決して見つめていないのではないのでしょうか。

本来あるべき正しい理解から外れたから失敗がもたらされた。そうであれば正しい答えを知って、行うべきだ。それが失敗の克服であり、成功につながる。こう考えるのが当たり前と思われています。

その当たり前さは何を支えにしているのでしょうか。人間は長らく知りえたことの拡張によって世界の謎を探求してきました。こうしたスタイルによって人間の知のあり方を決めてきました。その方法にあまりに慣れたせいでしょう。人は世界を自分が見たものの総量に等しいと錯覚してしまうようになります。目から入る情報は一秒間に*一〇〇〇万ビット以上。けれども意識にのぼるのは毎秒四〇から五〇ビットに過ぎないと言われています。

⑦ 人間的な理解とは絶えず世界の断片化を、誤解を意味しています。世界の側からすれば、人の理解とは常に失敗の連続、誤

りにしかならないのです。

手にしたものが常に間違いだとして、代わりに手に入れた正解も実は誤解の可能性が高い。だとしたら正しさを求めても、それは断片的な答えを求めることにしかならない。そうであれば、どこかに正解があるはずだと、手にしたものをすぐさま放り投げるのではなく、掴んだ失敗や間違いを余すことなく体験し、それを徹底して味わってみる。それがこの世界のわけのわからなさを「わけのわからないもの」としてまると理解するたつたひとつの道なのではないでしょうか。

私たちはどこからやって来て、どこへ去っていくのかわかりません。生きるということは、根拠付けることのできない、c 里霧d の只中を生きるといふことで、手近な正解に回収されるはずもないのです。

見慣れた暮らしは切れ切れの情報に支えられた事柄に過ぎないと頭ではわかったとしても、そこに強いリアリティを感じるのも嘘ではありません。ありありとした実感は覚えても、目前の現実は本当でもなければ嘘でもない。というのは、確実に根拠付けられない世界に、気づけば投げ出されてしまっているからです。

私たちは閉じた正しさの体系に還元されるような存在ではなく、私たちの外にあるわけのわからない世界との関係性において生きています。

ものごとの理解が間違っていたとしても、それにもかかわらず私たちは現にこうして生きています。なぜなら生きるとは、生きるという行為の中で解決されていく、決して正解のないプロセスの連続だからです。だから私たちは世界についての謎を尋ねるのです。

言葉を覚えたての幼子が飽きもせず「なぜ？」を連発するのはどうしてでしょうか。それはおそらく答えを欲するのではなく、ただ問うているからでしょう。言葉を覚え、歩み始めるとは、この世界に身を乗り出したということです。

かつて私たちは正しさよりもそうして身体を賭けた行為によって自分の生を支えるところに喜びを覚えていました。そこで起きた失敗は否定されることではなく、ただの失敗、ただの選択、ただの通過点でしかなかったはずです。

(ユンウンデ 尹雄大『モヤモヤの正体』より。問題作成の都合上、本文を改めた部分がある。)

(注)

- *ブックレビュー……書物の批評や紹介しょうかい。
- *オーバーフロー……多すぎてあふれ出ること。
- *辟易と……うんざりと。
- *俯瞰して……広い視野で見えて。
- *ペナルティ……ルール違反いはんに与える罰ばつの規定。
- *件の……さっきの。
- *一〇〇〇万ビット……ビットはコンピューターなどに用いられる情報量の単位。

問1 傍線部①「少し困ったような顔をして」とありますが、その理由の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分が読んでみたいと思う本に、これまで出会ったことがないから。
- イ 自分の感覚をみかくためには、一流の人がすすめる本を読むべきだから。
- ウ 自分は新しい生き方をしたので、古い本を読んでも仕方がないから。
- エ 自分の好きな本を選べと言われても、正しく選ぶ力がないと感じているから。
- オ 自分がどういふ分野に興味があるか、考えてもよくわからないから。

問2 傍線部②「あらかじめ用意された時代の感受性の枠にはまっている」とはどういうことですか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 誰もが正しいと認めるものがあり、それを得るのがよいという風潮を疑いもしないということ。

イ みんなが正しいと認めたものを選ぶのが安全だと、繰り返し言い聞かされてきたということ。

ウ 誰もが求める正しさがどこかにあるはずだと考えて、自分なりに追求しているということ。

エ みんなから正しいと認められるために、自分の考えを時代に合わせて変えてしまうということ。

オ 誰もが認め合うのが正しいことだという考え方に、いつのまにか縛られているということ。

問3 傍線部③「その経緯」とありますが、どのような経緯ですか。解答らんに合うように、四十字以内で説明しなさい。

問4 傍線部④「自分への疑念」とはどのようなものですか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 試行錯誤する中で何かを得たら、何かを失うことになってしまうのではないかというもの。

イ 自分の腕と眼力を磨いてくれるような体験には、出会えないのではないかというもの。

ウ いくら体験を重ねても、ものごとを判断する力は身につかないのではないかというもの。

エ 物事を見定める自信を得るには、つねに疑問を持つことが必要なのではないかというもの。

オ 物事を選ぶように導いてくれる解など、実際には存在しないのではないかというもの。

問5 傍線部⑤「堂々巡りに陥るでしょう」とありますが「堂々巡り」とはどういうものですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 何事もやってみないとわからないという思いはあるものの、結果が出るか失敗するかがわからないからこそ踏み出せない。しかしあらかじめ結果がわかっているならば自分も試してみたいというもの。

イ 失敗したら困るから一歩踏み出すのをためらうが、失敗するかどうかは試してみないとわからないのでまずはやってみる必要がある。しかし失敗の可能性を考えると自分は試せないというもの。

ウ 結果を保証しないのならばやる価値はないと思うものの、やること自体に意味があるという意見は理解できる。しかしやはり結果が出ない可能性があるなら自分はやめておきたいというもの。

エ やるという経験を通して自分の力が磨かれるのかもしれないが、力がつくかどうかはやってみないとわからない。しかし力がつかないかもしれないので自分は踏み出すことができないというもの。

オ 現状に不満はあってもそれを解決するのは自分以外の人だと思ってしまうので、つい待っているだけになる。しかしそれだと不満は解決しないので自分もやってみる以外にないというもの。

問6 傍線部⑥「彼を含む世代がどのような体験をしてきたのか」とありますが、「彼を含む世代」がしてきた体験の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 常に矛盾するばかりで根拠のないことを正しさだと言い聞かされ、何が正しいのかを考えたくなくなった体験。

イ 失敗はありえないこととされ、少しでも正しさから逸脱しそうになると周囲が無理やり手を貸してきた体験。

ウ 細かいことでも丁寧に取り組むことが重要だという考えを強制され、のびのびと自由に表現できなかつた体験。

エ 教える側があらかじめ設定した範囲のなかの選択だけが正しいものだと教え込まれ、従い続けてきた体験。

オ 失敗について根本的に考えることを禁じられ、自分自身で思考するのはよくないと思い込んでいた体験。

問7 二重傍線部 a・b・c・d にあてはまる漢字をそれぞれ一字で答えなさい。

問8 空らん部 A C にあてはまる語句として最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。ただ

し、同じ記号を二回以上選んではいけません。

ア そして イ だから ウ あるいは エ けれども オ なぜなら

問9 空らん部 X にあてはまる言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 正解をもたらすのであれば試していない

イ 正解を求めるために試すのではない

ウ 正解を教えるために試すのだ

エ 試すことは必ずしも正解ではない

オ 試すことによつて正解が見つかるのだ

問10 傍線部⑦「人間的な理解とは絶えず世界の断片化を、誤解を意味しています」とありますが、このように言えるのはな

ぜですか。その理由の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 一部の人間が知り得た少ない情報から作り上げた正しさを信じて、世界をよりよくすることはできないから。

イ これまでの間違^{まちが}った認識をもとに世界について考えを深めても、いつそう大きく間違^{まちが}うことになるだけだから。

ウ 世界の謎を解き明かしてきたやり方を当然だと考えてしまうと、今より知識を増やす必要を感じなくなるから。

エ あらかじめ決まっている正しい理解が存在するという前提に立つと、世界はおもしろい場所ではなくなるから。

オ これが世界の全てであると人間が考えている情報は、世界に本来存在している情報の中の一部にすぎないから。

問11 傍線部⑧「身体を賭けた行為によって自分の生を支える」とはどういうことか、八十字以内で説明しなさい。

問12 本文を読んだ中学生が、本文の内容をもとに自分の考えを話しています。本文で述べられている内容と食い違う考えを話している人を一人選び、記号で答えなさい。

Aさん 「私は本を選ぶとき、自分の気になるものや好きなものを選ぶと思うとわくわくするけれど、本文に出てくる『彼』の場合、どこかにある正解や次々と飛んできかねない他の人の批判が気になり過ぎて、自分にとつてのわくわくもわからなくなっちゃっているのかなと思ったよ。」

Bさん 「たしかに。自分の読みたいものを読んでいたら成功につながることもあるのに、選ぶのも止めちゃうなんてもつたえない。何も選ばなければ失敗は遠ざけられるけれど、一緒に成功も遠ざかってしまうよ。失敗を必要以上にこわがらないで、成功の前段階として受け入れたいね。」

Cさん 「失敗って、ある目的については思った結果になっていない今の状態、というだけのことかもしれないなあ。今を人生の失敗だと決めつけたがる人がいたとして、その本人だって、人生がどんなふうなものなのか全部はわからないんだから、失敗かどうかはわかるはずがないよね。」

Dさん 「幼い子が質問し続ける例はおもしろいね。自分を信じるっていうのは『自分なら成功できる』って思うことじゃなくて、『自分はどんな経験も学びにできる』って感じている状態なのかも。なんでも知りたがる子どもみたいに、なんでも、どんな結果になっても吸収するんだよ。」

Eさん 「じゃあ、一時的な成功を手に入れても、どうしてそうなったのか考えなかったら経験を積んだことにならないのかもしれない。経験を通して考えることで世界がどんなふうであるかがわかっていくんだとしたら、生きていくことは世界を知っていくことそのものだと言えるよね。」

〔二〕 福井県の高校に通う平政と長谷は、釣り部の活動で海へ通っている。海へ向かう「えちぜん鉄道」には、花が咲くような笑顔で接客する乗務員の伊藤早知子が乗っていた。これに続く次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（なお字数制限のある問いは句読点や記号も一字に含みます）

「困りますっ……」

と、そのとき小さな声が車輦の前のほうで聞こえた。即座に平政がはじかれたように立ちあがった。長谷もげげんな顔でそちらに首を伸ばした。

ドア脇のベンチ席の前に伊藤さんの姿が見えた。「困りますから」と抑えた声で言いながら中腰になって後ずさろうとしているが、ベンチ席に座った乗客に手を掴まれていたようだ。平政が気色ばんで通路に踏みだした。怒らせた肩から凄まじい怒気が膨れあがるのを目の前で感じて長谷はぎよつとしたが、以前伊藤さんが迷惑客に絡まれた話をすぐに思い出した。ベンチ席に座っているのは白髪頭にパーマをあてたばあさんだった。

「サチコちゃんにはほんとお世話になったでえ、こんくらいのことさせてのお」

ばあさんが白い封筒を伊藤さんの手に押しつけ、伊藤さんが頑なに拒んでいるという状況だった。長谷自身は今のところ馴染みのあるものではないが、金銀の紐がごてごてとかかったそれはどうやら結婚式で渡す、あれだ、あれ——
* 祝儀袋だ。

「お客様をご案内するのは業務ですから。お気持ちだけありがたく頂戴いたします。金銭をいただくのは困りますので……」
「サチコちゃんは孫みたいなものやと思ってるので。* 幸せんなんねの。あんたは幸せにならんとあかんでの……」

しまいには **A** と泣きはじめたばあさんを伊藤さんが心底困り果てた様子でなだめる。

平政が舌打ちしてもとの席に座りなおした。座席が荒っぽく軋む音に伊藤さんが驚いて顔を向けた。今すぐ飛びだしていつて迷惑客を取り押さえんという体勢で長谷も身構えていたが、ばつが悪い顔で伊藤さんに一礼し、**B** と平政に倣って座った。

「変な客でなくてよかったな」

座席の陰で首を伸ばして囁く。

「ほうけ？ ふん、おれは変な客やったらよかったと思った」

窓のほうに顔を向けて平政が吐き捨てたことに耳を疑った。

「おいおい、失恋して自棄になったかっっていくらなんでも……」

「前みたいな迷惑な男の客やったら、最後に逆転劇が起るかもしれない……二回も助けられたらおれに恩感じて、結婚相手よ
りおれのこと好きになってくれるかもしれない、なんてな……。そんなうまい話、一瞬本気で期待してもたわ。これこそ*映研
が作りそうな話やな」

自虐的に笑った平政が表情を消してつと口を閉ざした。踵の低いパンプスの靴音が遠慮がちに近づいてきたので長谷も自
分の座席に姿勢を戻した。

「こんにちは……あの」

「終点まで」

礼を言おうとしたのだと思う。しかし伊藤さんが続きを口にする前に平政がぶつきらぼうに言うて定期を見せた。伊藤さん
が一瞬表情を曇らせたが、すぐに営業スマイルを取り戻して「はい。三国港までですね」と応じた。

伊藤さんの華奢な白い手と、平政の潮風と陽に晒されたごつい手のあいだで手書きの切符と小銭がやりとりされる。きつと
長谷が一緒に乗るようになるずっと前から繰り返されてきたのであろうやりとりが今日も繰り返されるのを長谷はすこし焦れ
た思いで見つめる。

長谷のぶんの乗り越し手続きも終え、制服の上から斜めがけにした*ポシエットに小銭をしまようと、

「それじゃあ、今日も釣り気をつけてくださいね」

と伊藤さんは今日も最後にそう言うて二人それぞれに微笑みかけた。長谷がぎこちないはにかみ笑いを返す一方で平政は
ずっと顔を背けていた。平政の非礼な態度に伊藤さんが傷ついたようにわずかに顔を歪めたが、黙って目を伏せ、座席を離れ

ていった。

「……今日までなんやと」

彼女が立ち去ってから、不貞腐れたような口調で平政が呟いた。意味が汲み取れず目顔で長谷が問うと、

「今日で退職なんやと。これが三国行き最後の乗務ってわけや。明日からはもう、乗っても二度と会えん」

「今日って、まじか」

たしか結婚したら大阪に行くという話だった。寿退社というのだろう。

彼女の手書きの字がボールペンで書き込まれた切符を太い指先で折りたたみ、壊れやすい物をそっと収めるかのような手つきで*ライフベスタのポケットにしまつて、平政がぼつりと。

「この切符、持って帰れんかな」

未練たらつたらじゃないか。

「そんなんやとおまえ、後悔するぞ。けじめつけたほうがいいんでねえんか」

「けじめってなんじゃ。もうそんなもんついてるやろ。とつくに撃沈してんのに、ごめんなさいされるためにわざわざ*告れつてか」

③ 平政の声色に苛立ちが滲む。学校ではクラスメイトに敬遠される鋭い眼光で睨まれても今さら長谷も怯みはしない。

「ほりゃほやけど、そんな態度やと伊藤さんに誤解されたまんまになるぞ。ちゃんと祝福してやれや。そのほうがおまえもすつきりするし、伊藤さんも安心するんでねえんか」

「あのばあさんみたいに金でも渡せつてことけ」

「金とは*言つてえんやろ。なんか他の……あるやろ、たとえばやっぱ、花とか」

「おまえな、おれにどんなツラして花なんか渡せつちゅうんじゃ。あつちはもう結婚相手がいるんやぞ。変な意味になるようなもん渡して相手の男が氣い悪なつたらあの人の立場が悪なるんやぞ」

「そんな細けえこと気にするか？」

「つたく、これやで脳みそまで筋肉野郎は……」

骨太な外見に反して平政は長谷なんかよりよほど繊細せんさいにものごとを考えている。平政の口ぶりからしてご祝儀なり花なりを贈ることなんてとつくに想像した上で、伊藤さんを困らせるところまで想像していたのだろう。そこまで平政が考えているのなら、そもそもそういう経験値のない長谷にはもうアドバイスできることはない。

「長谷がそんなに氣い揉もんでもいいやろ」

平政の声と目つきから*険けんがやわらいだ。

「不思議なもんやなあ。*先週の日曜に長谷と会ったんも偶然ぐうぜんやったけど、そつからこうやってもう一週間もつるんやもんな。最後の一週間、長谷がいてくれたでいいこともあつたんやぞ。長谷がいるぶん乗り越しの手間かかるで、ちよつと長く足とめてくれるやろ」

でかい図体ずたいして、そんなちっちゃい幸せ噛みしめて、自己満足した気になるなよ。

「そんなんで、そんだけで、いいわけないやろ……」

やっぱりこのままにも起こらずに終わっていいとは思えなかった。このままだと彼女がいなくなったあと平政の気持ちだけが*地縛霊じばくれいのようなものになってこの電車に残ることになりそうで、齒摩はがゆさが募つった。

ばあさんも途中駅で下車し、観光客は終点の一つ手前の三国の港町を散策する駅でみんな下車したので、終点の三国港まで乗っていったのは長谷と平政だけだった。

釣り道具を手分けして担かつぎ、駅舎を抜ぬけてから、どちらからともなく肩越しに振り返った。

ここがえちぜん鉄道の北端ほくたんだ。待合所を兼ねた平屋建ての駅舎はたいていの時間駅員も利用客もない無人駅になる。折り返しの福井行きとなる電車の脇で伊藤さんと運転士が業務連絡とおぼしきものを交かわしていたが、駅舎の公衆便所からでてきた釣り人風の男が運転士と親しげに立ち話をはじめたので、伊藤さんのほうが一礼して距離きょりを取った。

平政が担いだ荷物を揺ゆらして進行方向に向きなおった。後ごろ髪かみを引かれる思いながら長谷もあとに続いた。そのときだった。

「あ のっ、待 っ て く だ さ い っ」

呼 び と め る 声 と と も に、若 干 危 な っ か し く ヒール で 駆 け る 足 音 が 追 い か け て き た。

軽 く 息 を 切 ら せ て 立 ち ど ま っ た 伊 藤 さ ん を 長 谷 は 驚 い て 振 り 返 っ て か ら、隣 の 平 政 の 顔 を 見 あ げ た。平 政 は 身 体 半 分 だ け 振 り 返 っ た と こ ろ で、信 じ ら れ な い と い う 顔 で 目 を 見 開 い て 固 ま っ て い た。

「す み ま せ ん、急 に 呼 び と め て。あ の、こ れ …… よ か っ た ら も ら っ て い た だ け ま せ ん か」

伊 藤 さ ん が 腰 の ポ シ ャ ッ ト に 手 を や り、白 い 薄 紙 の 袋 を 引 き だ し た。

袋 の 表 に 『御 守』 と 印 字 さ れ て い た。* 虚 空 を 凝 視 し た ま ま 固 ま っ て い た 平 政 が 訝 し げ に 目 線 だ け を 袋 に 向 け た。

「な ん だ よ ……」

い つ も 繕 っ て い る 不 機 嫌 さ が 抜 け 落 ち、驚 き で 掠 れ た 声 だ っ た。

「ず っ と お 礼 を 考 え て い た ん で す け ど、ち ょ う ど い い も の が な か な か 思 い つ か な っ た ん で す。大 阪 の、今 度 住 む 街 の 近 く に 住 吉 大 社 っ て い う と こ ろ が あ っ て、先 週 の お 休 み に 彼 と そ こ へ お 参 り し た と き に、あ っ、こ れ だ …… っ て、や っ と 見 つ け て」

実 際 に そ の と き の こ と を 思 い だ す よ う に 伊 藤 さ ん の 顔 が ふ わ り と ほ こ ろ ん だ。

伊 藤 さ ん の 細 い 手 指 か ら、そ の 倍 く ら い 太 く て 骨 張 っ た 平 政 の 手 指 が ど こ か お っ か な び つ くり、顕 微 鏡 に 載 せ る 薄 い ガ ラ ス 板 で も 扱 う か の よ う に 袋 を つ ま み あ げ た。一 緒 に ど う ぞ と い う よ う に 伊 藤 さ ん が 目 配 せ し て く れ た の で 長 谷 も 袋 を 開 く 平 政 の 手 も と を 覗 き 込 ん だ。

「わ ……」

④ 平 政 の 口 か ら 素 の 声 が 漏 れ た。

青 い 小 魚 を 模 し た ルアー だ っ た。い や、ルアー の 形 を し た お 守 り だ。

「住 吉 大 社 は 海 の 神 様 を 祀 っ て る ん で す っ て。よ か っ た ら、持 っ て い っ て く だ さ い」

魚 の 尾 に つ い た 『釣 人 守 護』 と い う 字 に、往 路 で 会 う た び に 伊 藤 さ ん が 平 政 に か け て い た 言 葉 が 重 な っ た。

今 日 も 釣 り 気 を つ け て く だ さ い ね …… こ れ か ら は も う 言 う こ と が で き な い そ の 言 葉 の か わ り に 平 政 に 渡 し て い く、伊 藤 さ ん

の気持ちなのだと思った。

なるほど、ちようどいいものだ。平政が気にしていた、変な意味、を伊藤さんのほうも気にしているいろいろ考えあぐねていたのかもしれない。結婚を控えたおとなの女性の節度のようなものを感じ、伊藤さんを好ましく思うと同時に、

「X、か……」

やはり平政の想いが実る可能性はないんだと、友人の失恋の痛みが長谷の胸にも沁みた。

本物のルーアに比べたらそのお守りはまったく精巧な作りのものではない。しかし平政は手のひらに載ったそのぴかぴかした青い魚を食い入るようにはばらく見つめていた。思わずといったように握りしめようとしたが、閉じかけた指を開き、入っていた袋に黙って戻した。まさか突っ返すつもりかと長谷は一瞬危ぶんだ。

しかし平政はライフベストの胸ポケットに袋を収めると、身体の向きを正して伊藤さんと向きあった。身体を傾けて座っている平政に伊藤さんがかがんで応対するというのがいつもの構図だったので、正対すると森で出会った熊と少女みたいな感じで、平政が覆いかぶさるくらいになる。伊藤さんが目をぱちくりさせて平政を見あげる。

平政が一つ息を吐き、吸った。勇気を振り絞るように身体の横で右手を握り込んだ。いがらっぽい低い声が、いつものぶつさらぼうではなく、一音一音、丁寧に絞りだされた。

「結婚、おめでとございます。幸せに……なつてください……」

いつも控えめな笑みで車内を見守っている伊藤さんの丸顔に、乗務中は一度も見たことのなかった、華やかな、満開の笑みが広がった。

「はい。ありがとうございます」

平政も照れくさそうに少々歪んだはにかみ笑いを返した。

ふとなにかに引つ張られたような気がして長谷はホームへと目をやった。白にブルーとイエローの線が入った爽やかな配色の車輛が線路の終端に停車している。車輛に縛られていた半透明の幽霊が、屋根をすり抜けて空へと消えていくのが、長谷の目にだけ浮かんで見えた。

伊藤さんが表情をやや引き締め、身体の前で右手に左手を百三十度の角度に重ねて、恭しくお辞儀をした。
「本日までのご乗車、誠にありがとうございました。元気でいてください」

(壁井ユカコ『空への助走 福蜂工業高校運動部』より。問題作成の都合上、本文を改めた部分がある。)

(注)

- * 祝儀袋……結婚などのお祝い金を入れる、飾りのついた封筒。
- * 幸せなんねの……「幸せになるんだよ」という意味。
- * 映研……平政と長谷の高校の映画研究会のこと。恋愛ドラマを制作している。
- * ポシェット……紐付きの小さな鞆。
- * ライフベスト……ライフジャケットのこと。
- * 告れってか……「告白しろっていうのか」という意味。
- * 言っってえんやろ……「言っってないだろう」という意味。
- * 険……険しさ。
- * 先週の日曜……平政は、偶然出会った長谷をこのとき釣り部に勧誘した。
- * 地縛霊……特別な事情でその土地に宿っている霊。
- * 虚空……なにもない空間。
- * ルアー……釣り具で、虫や魚に似せて作った偽物の餌。

問1 二重傍線部 a 「げげんな」、b 「後ろ髪を引かれる」の本文中での意味として最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

a 「げげんな」

ア あやしそうな

イ 不思議そうな

ウ おそろしそうな

エ 迷惑そうな

オ 不安そうな

b 「後ろ髪を引かれる」

ア 納得なっとくがいかない

イ なんとなく後ろめたい

ウ 心残りで去りがたい

エ 悲しくてやりきれない

オ にわかには信じがたい

問2 空らん部 A、Bにあてはまる言葉として最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。ただ

し、同じ記号を二回以上選んではいけません。

ア さめざめ

イ ひそひそ

ウ ごてごて

エ きびきび

オ すごすご

問3 傍線部①「心底困り果てた様子で」とありますが、その理由の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

えなさい。

ア ばあさんが無理に金銭を渡そうとするのを強く断って泣かせてしまい、申し訳ないから。

イ ばあさんから孫みたいなのだと言われても、自分は祖母のようにには思えないから。

ウ ばあさんが金銭を渡そうとした上に感極まって泣き出してしまい、扱いかねているから。

エ ばあさんのやり取りで他の客に迷惑をかけたと思いい、どうすればよいかわからないから。

オ ばあさんにサチコちゃんと呼ばれて、業務中にはふさわしくないと感じ気分を害したから。

問4 傍線部②「舌打ちしてもとの席に座りなおした」とありますが、それはなぜですか。その理由の説明として適当なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 伊藤さんに何とか気持ちを伝えようと決心したが、ばあさんによってタイミングを逃し、不快に感じたから。
- イ 以前のような迷惑客ではなかったので、伊藤さんを助けて好きになってもらえなくて、苦々しく感じたから。
- ウ 自分にとって大切な存在である伊藤さんに迷惑をかけているばあさんのことが、とても腹立たしかったから。
- エ いつの間にか伊藤さんを好きになってしまっていたことに気づき、戸惑う自分を落ち着かせようとしたから。
- オ 伊藤さんに告白するかどうか悩みあれこれ迷っているだけで、結局は何もできない自分に嫌気がさしたから。
- カ 伊藤さんへの気持ちを捨てきれずに、変な期待を抱く自分にあきれて、おだやかな状態を保てなかったから。

問5 傍線部③「平政の声色に苛立ちが滲む」とありますが、このときの平政の心情として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分が気にしている告白のことをわざわざ口に出して伝えてくる友人に対し、嫌悪感を抱いている。
- イ 伊藤さんに告白して失敗することを想像するだけでつらくなるので、何も考えないようにしている。
- ウ 失恋すると分かり切っているのに、まだ望みがあると思っっているらしい友人を不満に思っている。
- エ 本当は告白したいと思っっているが、うまくいきそうな告白の方法が思いつかずイライラしている。
- オ 自分なりに恋を終わらせるつもりだったのに、無理に告白させようとする友人に腹を立てている。

問6 傍線部④「青い小魚を模したルー」に伊藤さんが込めた思いを二つ、解答らんに合うように、それぞれ二十字以内で具体的に答えなさい。

問7 空らん部 X にあてはまる最もふさわしい言葉を、伊藤さんの発言の中から抜き出して答えなさい。

問8 傍線部⑤「華やかな、満開」の笑みが広がった」のはなぜですか。その理由を六十字以内で説明しなさい。

問9 傍線部⑥「車輪に縛られていた半透明の幽霊が、屋根をすり抜けて空へと消えていくのが、長谷の目にだけ浮かんで見えた」とありますが、「長谷の目にだけ」見えた「半透明の幽霊」とはどのような思いの表れだと考えられますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 伊藤さんへの失恋のつらさを思い出させる電車に対して抱く、平政のどうにもならない切なさ。
- イ 好きになってくれないうらみを平政から向けられ続けたことによる、伊藤さんの大きな苦痛。
- ウ 最後まで伊藤さんに告白する勇気を出せなかったことがひっきり続ける、平政のあわい後悔。
- エ 平政がいつも不機嫌なのは自分を嫌いだからだと思いきんだ、伊藤さんの行き場のない悲しみ。
- オ 伊藤さんにきちんと向き合えないためにいつまでも引きずってしまう、平政の重苦しい恋心。

問10 表現や構成の特徴の説明として適当でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 伊藤さんと平政の身体の特徴を対比的に描くことで、視覚的なイメージを思い浮かべやすくなっている。
- イ 長谷の立場から見たことが描かれているので、長谷の心の中で考えた言葉は地の文で表現されている。
- ウ 電車内という限られた空間だけで展開する単調な話だが、細やかな心情表現が豊かさを生んでいる。
- エ 方言を交えた会話は、軽快なテンポを生むとともに、登場人物の性格や心情を読者によく伝えている。
- オ 態度の悪かった平政が最後に伊藤さんを祝福することで、失恋の悲しみだけでなく心の成長も描いている。

③ 次の傍線部のカタカナを漢字で書きなさい。

- ① 作家のバンネンの作品。
- ② 昼夜のキャンダンの差が大きい。
- ③ センモン家の意見をきく。
- ④ イチヨウが弱い人はからいものを控えよう。ひか
- ⑤ サトウの取りすぎには注意しよう。
- ⑥ 大規模にコクモツを育てる。
- ⑦ ジョウキ機関車。
- ⑧ 母は会社の最高カンブだ。
- ⑨ 以前ツトめていた会社。
- ⑩ 身のケツパクを証明する。



2024B1

↓ここにシールを貼ってください↓

国語 解答用紙

受験番号							
名前							

問1	二	問12								問11	問9	問8	問7	問4			問3	問1	一
a												A	a						
b		さん										B	b						
問2											問10	C	c						
A													d						
B																			

という経緯。

気持ち。

気持ち。

			三	問9		問8	問7		問6	問3
⑩	⑦	④	①							
	⑧	⑤	②							
	⑨	⑥	③							